

れきし 散歩

すずかのせきあと

鈴鹿関跡 ～平成24年度調査から～

はじめに

鈴鹿関は、古代の法律である律令によって定められた関所で、愛発関(福井県敦賀市付近)・不破関(岐阜県関ヶ原町)と合わせて古代三関(律令三関)と呼ばれ、わが国の古代史上最も重要な遺跡の一つです。

鈴鹿関は、関町内に存在すると考えられてきましたが、その位置については不明でした。しかし、平成17年度に観音山南西麓で土塁と大量の古代瓦(瓦溜)が発見され、観音山周辺に鈴鹿関があった可能性が高まってきました。

これまでの調査成果

鈴鹿関の調査は、平成18年度から継続して実施しており、次のようなことが分かっています。

- ① 観音山南西麓で発見された土塁は、築地(練り土をつき固めて造った塀で、塀の上を瓦などで葺いたもの)の痕跡であり、出土した瓦(重圏文軒丸瓦)から、奈良時代中頃に造られたものであること。また、この築地は、その位置関係から、鈴鹿関の西城壁であると考えられること。(平成18年度調査)
- ② 城山南西で大量の古代瓦と西城壁築地の基底部が確認され、出土した瓦から奈良時代中頃に造られたものと考えられること。(平成20年度調査)



重圏文軒丸瓦



平成20年度調査区で確認された瓦溜

- ③ ①と②から、西城壁築地の北部と南部が明らかとなり、両地点間は、直線距離で約500m以上あることから、鈴鹿関は古代三関の中でも最も規模が大きいと考えられること。
- ④ ①と②の地点間をつなぐ築地の存在を明らかにするため、西の追分や城山山中で発掘調査等を実

施したところ、奈良時代の瓦が出土し築地の存在がうかがえたものの、築地本体の痕跡は確認できなかったこと。(平成21年度～23年度調査)

今年度の発掘調査で瓦溜を確認

今年度の調査では、これまでの調査成果を踏まえ、①と②の地点間をつなぐ築地が、城山のどの位置に接続するのか明らかにすることを第一の目的として、城山西麓で調査を開始しました。



この調査では、大量の奈良時代の瓦や築地基底部のものと考えられる人頭大の石等が約1mの厚さに重なって出土しました。これらは、築地が崩落して城山の斜面下に堆積したものと考えられます。

このことは、築地が城山の地形に沿って斜面上部に築かれていたことを示しており、西城壁の経路を明らかにする上で重要な成果です。



平成24年度調査区で確認された瓦溜

今後は、今回の調査で見つかった瓦溜に関連する築地本体を明らかにすることや、この築地がつながっている経路を重点的に調査することが必要で、こうした調査の蓄積により、まずは西城壁部分の国史跡指定を目指したいと思います。